百々裏話（64）

おもて　あきら

【三番叟の問答の古態―その二―】

三番叟問答の完全な形としては、前回に紹介した寛永十年奥付の謡本『式三番』が管見では最も古いが、完全な形ではないものの、寛永版本以上に三番叟問答の古態を伝えていると思われる資料が他にも存在している。檜常太郎氏蔵の『秘事集』一冊がそれで、同書は、江戸初期、恐らくは寛永頃の書写と思われる中型横本で、内容は鼓伝書である。天正以前に成立した似我与左衛門国広太鼓伝書の影響下にあると認められる説や、慶長五年に八十三歳で歿した大蔵二助虎家（金春座大鼓方）の所説が引かれている点などから、原本は慶長頃に成立したものと考えられる。その原本を破損の跡まで忠実に写したのが檜本の『秘事集』で、その一部に次のような記事が見られる。（ヘ印や・印は底本朱書。・の打ち違えがあるがそのままにした。濁点は底本には稀に附されているが、多くは表が補った。括弧内は行間に追記されている分）

○三番サルガクノ云事

ヘアド、申所ニ・ハヤ〳〵ト御立・祝着ニ存候・サテモソレガシハ・ヲササキ・時ヨリ□[1]□ホナル者ニテ・拍子ニカ、リテ・人ヲヨビ申事ガスキ・ニテ候・間・アドノ大夫殿ヲ・拍子ニカ、リテ・ヨビ申サウズルガコタヘ・アラウズルカ　ヘ先御ヨビ候ヘ・コタヘテ見申候ベシ　ヘヤドノヤ・ヤドノヤ・ヤドノヤ・ドノヤ・ヤドノヤ・ヤドノヤ　ナンドキニコタヘ申サウ　ヘ人ガヤトイヘバ（ヤト云・コトバノ下カラ社・コタユ物ナレ・ヲイ）テ・アサツテ渡・ヲコタヘ候ヘ　ヘサアラバ今一度・御ヨビ候ヘ・コタヘ申サウ　・ヤドノヤ・ヤドノヤ・ヤドノヤ・ヤドノヤ・ヤドノヤ・ヤドノヤ・ヤドノヤ・ナゾトヨ〳〵・ナゾト・ナゾ候ヘゼウ殿　・ヤドノ・ヤドノ・ヤドノヤ・トノヤ・ヤドノヤ・トノヤ・ヤドノヤ・ナゾトヨ　・ナンボウ・ヨイ・天気ニテナイカ

○アド、申所ニ・ハヤ〳〵ト御立・祝着ニ候・爰ニ面白物語ノ候・語ツテ聞セ申サウヘ急デ御物語候ヘ　ヘ扨モソレガシ・尾張ノ国・アツタヘ・下シ時・近江国・カヾミ山ノ宿（ヤド）ニ・付シカバ・ヤドノ亭主・色〳〵・モテナシ・シカバ・十七八ノ・ユウクンノ・ナガヘノ・調子ヲツ・トツテ・ハツタト・アゲテ・ウタウタ・メイトクノ〳〵・酒ヲバ・ノマデ・メイトクノ・人情ヲ・ノムトカヤ・エイサハトウタ[2]・サゾナ・覚ヘタリ・カミヲ[3]乱ハ・ヲ、キシモハカツラ川アユトル川トハ云ナガラ・又・ウルカト聞[4]バ・ウコノ物・聞[4]ハウコノシレ物・アマリノ面白サニ・物ト・ウタウタ　ヘ何トウタウタ　ヘヨツヒト・ウタウタ

○アド、申所ニ・早々立・近比祝着申て候・就其ソレガシハ・一段目出度者ニテ候・其イハレハ・子ヲ十人持て候　ソノ名ヲバ・何ト申ゾ　・ヲトヤウ・姫ヤウ・松ヤウ・竹ヤウ・ダンダラ・イナゴニ・カイツク・スイツク・ヒウチ袋ト付タ　ヘヤアラ・ヲモシロイ・名ヤ

○アド、申所ニ・ハヤ〳〵と・御立祝着申て候・夫ニとハヾ・がたりにて候へ共・それがしハ・歌道をすきて候　ヘ先ハちか比浦山しき事にて候　ヘさても此ほど・大りより・つくり道と云・題を・御出し候・それがしや[5]・ようで候　ヘ何御よミ候ぞ（ツクリみち・往来の人の・ミおれる[6]ハ）かな用こそありて・とをるらうとようだ　ヘちか比面白候

1、原本虫損部分。2、「トウタウタ」などの誤写か。
3、「カシラ」とも読める。4、「間ハ」とも読める。
5、誤脱または誤写あるか。6、「とおれる」の誤写か。

以上四種の問答のうち、最初の分は、寛永

版本では二日目、現在は日数無限定とされている「田歌」の形に該当し、三番目の分は、寛永版本も現在も三日目とする「子宝」の形に相当する。眼目となっている趣向への導入部分が概して簡略である点など、寛永版本の整った形に比較して、『秘事集』の方が古拙な点をより多く残していると言えよう。

二番目の分(「鏡の宿」と仮称する)と四番目の分(「作り道」と仮称する)とは、寛永版本にも現在の演出にも見えない形式であり、『秘事集』以外には管見に入らぬ分である。「鏡山」の方は、面白い物語を語って聞かせることになっているが、語る内容は狂言茶壺の中の小拍子にかかっての仕型話に似た感じで、少なくとも二つの歌謡の部分(小歌であろうが、『閑吟集』等には見えない)は節がかりであったろう。そうした演戯的な内容の他に、興に乗じて歌ったのが「ヨツヒ」(笛の擬音か)であったという期待はずれの滑稽味をも備えており、甚だ狂言的な問答と評してよいと思われる。「作り道」はその点単純であり、歌道を好くと自讃する老翁の口から言い出された歌が、歌とも言えぬしろ物である滑稽さのみであるが、それとても、三番叟問答は狂言方の分担にふさわしくおかしみが盛りこまれているという、前々回の考察を裏付けると言い得よう。

右のような二種類の珍らしい形式を伝えている点と、現在の初日の問答、及び二日目の形(烏帽子の祝儀)を含まない点とが、『秘事集』所載「三番サルガクノ云事」の提起する主要な問題点であるように思われる。

まず後の点について考えると、『秘事集』が四種の問答を収めていることは、室町中期以後の勧進能が四日間を通常とし、日によって翁猿楽の演出を変更した事実と対応しているかの如くであるから、ある時期にある系統の猿楽が演じた三番叟問答は右の四種のみであって、現行初日の形や「烏帽子の祝儀」の形は含まれていなかった、とも考えられる。しかし一方、初日の形は衆知のものであったため『秘事集』はそれを取り上げず、珍しい形のみを集めた、とも解し得る。初日とか二日とかの注記が存しないことが、体系的記載ではないことを暗示しているようにも思われる。初日の形については確かにその可能性が認められると思うが、「烏帽子の祝儀」の場合は、それが寛永版本にも含まれていないだけに、たまたま『秘事集』の編者がその存在を知らなかったために収められなかったと説明することは、困難であるように思われる。少なくとも、室町末期から江戸初期へかけての頃の三番叟問答に於いて、「烏帽子の祝儀」は影の薄い存在であったと推測してよいのではなかろうか。それとは逆に、「田歌」の形が比較的優勢であったものらしい。

『秘事集』に現存しない二種の問答が掲載されている事実は、三番叟問答がかつては固定的であったわけでなく、幾つもの形式が並び行われていたことを推測せしめる。「作り道」の形は歌の題と歌とを変更すれば直ちに新しい形に変更することが可能であり、即興的に問答の内容がとりかえられていたことすら想像できるのではなかろうか。『秘事集』とは異なる別形式の問答が見出だされる可能性も相当大きいように思われる。

並び行われていた幾つもの形のうち、淘汰されて残ったのが現存四種であり、前述した「田歌」と「烏帽子」の祝儀の勢力交替に現われている如き変動は、江戸初期までは続いていたと見なされる。流動の巾、変遷の程度と言い、固定化に向かう時期と言い、三番叟問答と劇としての狂言の歴史は、極めて類似していると言えよう。特殊扱いされてきた翁式三番の中に於いても、狂言方担当だった三番叟は、狂言としての特質を保持してきたようである。翁猿楽の歴史という観点からのみならず、初期狂言の様相をさぐる手がかり、その他狂言の歴史の観点からも、三番叟問答はもっと重視されてよいのではなかろうか。

(44・3・5)